

---

# 月幻影

緑川海月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月幻影

### 【Nコード】

N9295E

### 【作者名】

緑川海月

### 【あらすじ】

人を食べなければ生きられない種族があつた。しかし“人”と共存するために、“人”を狩る者達は“監視者”によつて葬り去られることとなる。これはその“監視者”たちの、妖しくも哀しい物語。

桜

闇夜に紛れ

影が蠢く

それらは全て 籠の鳥

薄紅からは逃れられない……

『桜』

街明かりの消えてしまった夜半過ぎ。  
空には星々を従えた上弦の月が、静かに地表を照らしていた。  
サラサラと心地よい風が通り過ぎ。  
ヒラヒラと桜の花びらが舞い落ちる。

少女は静かに瞳を閉じた。

ザアアアツ。

突如、突風が吹き荒れ、少女の長い黒髪を躍らせた。薄紅の嵐が少女の姿を覆い隠す。

やがてそれも収まり、少女の姿は月明かりに照らされた。

長く美しい黒髪。

大きな黒い瞳。

白く透明な肌に映える紅い唇。

一部の隙もないその姿は、少女とは思えない妖艶さを醸し出していた。

その少女の周りに、ひとつ、ふたつと影が増えていった。十ほどの影は、ぐるりと少女を取り囲む。

そして素早い動きで少女に飛び掛ってきた。

少女は慌てる素振りはいま一つ見せず、ただ、微笑んだ。

そしてゆっくりと左手をかざす。

その手のひらの中に、吸い込まれるかのように桜の花びらが一枚舞い落ち、ポツと音をたてて炎へと変化した。

それが合図かのように、周りの花びらが次々に炎へと変化し、ふわりと舞った後、目にも留まらぬ速さで影たちに襲い掛かった。

「……！」

影たちはそれを避けることも、逃げることも許されず、炎の中に消えてゆく。

それを眺めて、にっこりと愛らしい微笑みを浮かべる少女。

「貴様あつ！」

突如、背後から影が襲い掛かる。炎から免れた者らしい……。

しかし少女は微笑みを浮かべたまま、振り向こうとはしなかった。

ザシュツ…。

血飛沫が舞う。

淡い桜の花びらが、真つ赤な鮮血に染まっていく…。

少女は、振り返る。

「…ありがとう」

微笑を向けるその先には 血に濡れた日本刀を手にした少年がいた。

少女は鮮血の上を軽やかに飛び越え、少年に飛びつく。

「疲れちゃった。早く帰ろう」

少年はその言葉に僅かに頷き……そして、二人は寄り添いながら歩きます。

やがてその姿は舞い散る桜の中に消えていった。

その行方は。

月だけが知っている……。

## 闇姫は笑う 1

明るい陽の中で

あなたはいつも笑っていた

ずっと近づきたいと思ってた

それが

偽りだとも気付かずに

『闇姫は笑う』

クスクスクス…。

静寂の中から聞こえてくる笑い声。

その声から逃げようと、少女は必死になって闇の中を駆け抜けた。走りすぎて喉が痛い。胸も苦しい。足がもつれてくる。次第に近づ

いてくる笑い声。

「！」

木の根に躓き、転んでしまふ。少女は立ち上がろうとしたが、全身が疲労しきっていて、もうそれは叶わなくなっていた。

「どっ、どっしてっ…！」

少女は叫ぶ。

「どうしてあなたがっ…！」

怯える少女を見下ろし、笑い声の主は満足げに微笑んだ。

その直後。少女の首が飛んだ。笑い声の主はその首を拾うと、恐怖に満ちた少女の顔に喰らいついた…。

（ああ、だるい…）

午前九時五十分。

白石まどかは鼻をすすりながら学校へと向かっていた。

二、三日前から風邪気味だったのだが、昨日の夜から急激に悪化してしまい、病院で朝一番に診てもらったの登校だった。微熱のある体がダルくて仕方がない。

（ああ、もう……何でこんな日にテストなんかあるのよ……）

目前に迫っている受験の模擬テストが、本日五時限目に予定されていた。そんなものがなければ、今頃は暖かいベッドの中でおやすみなさい、だったのに。

「ついてない…」

少しふらつきながら昇降口までたどり着く。

まだ授業中のため、廊下はしんと静まり返っていた。まどかはブツブツ文句を言いながら、三年生の教室のある三階へと向かった。

(…あれ?)

ふと、足を止める。階段を上がりきったところで。

誰もいないはずの廊下に、人が立っていた。

長い黒髪の、同じセーラー服を着た女の子だ。

その子はゆっくりとこちらに顔を向けてきた。視線がぶつかる。

その一瞬だけ、音がどこかへ行ってしまった。その大きな瞳はまどかを捉えている。まどかも、その瞳に釘付けになった。

なんて、透明な、ひと。

なんて、綺麗な、瞳。

「まどか！」

名を呼ばれてハッと我に返る。

目の前に立っていたのは、セミロングの女の子。先程の少女とは違



う人…。

「あれえ？ ゆうちゃん？」

それはまどかの親友、佐々木優子であった。

「何ボーツと突っ立ってんの？ 教室入りな」

「ああ、うん……さっきの人は？」

「さっきの人？ 誰？」

「あれえ…？」

辺りを見回すが、長い黒髪の美少女はどこにも見当たらなかった。代わりに、移動教室などで各クラスの者たちがまどかと優子の周りを行き交っている。

## 闇姫は笑う 2

「ゆうちゃん、いつ授業終わったの？」

「はあ？ ベル鳴ったでしょ…。まどか、あんた熱あるんじゃないの？」

「うーん…？」

確かにボーツとしているけれど、熱のせいではないような気がする。

（おかしいなあ…）

確かに、さっきはまだ授業中で、まどかの前には綺麗な少女が立っていたと思ったのに。

「幻覚でも見たのかな」

「はあ？ ちょっとまどか、大丈夫なの？」

「うん、薬飲んだし」

と、自分の教室に入っていく。

そして自分の席についてから、“いつもの席”にいるはずの人物を探した。

まどかの斜め前の席で、いつも難しそうな本を読んでいる男の子、西沢卓巳。

本ばかり読んではいけるけれど、人付き合いはいいし、一緒に話しているとても楽しい。今、まどかの一番気になる人。

しかし、卓巳は自分の席にはいなかった。いつもなら座って本を読んでいるのに……。  
ぐるっと教室を見渡したが、卓巳の姿はどこにもない。

(休んでるのかな?)

少しがっかりする。

「そういえばさあ」

優子が話しかけてくる。

「昨日のニュース、見た？」

「ああ……昨日はちょっと寝てたから、見てない」

「そうなの？ あのね、隣町で殺人事件があったらしいよ」

「えー？」

「ほんとだって。おかげで今日の朝礼、校長の話の長いことつたら……。まあそれはいいとして、何と、足首しか残ってないってさ！  
しかも！ 食い干切られたみたいなんだって！ 警察では獣か何かの仕業だって言ってるみたいだけど」

「うえー……何それー」

「怖いよねー。まだその辺うるついでるかもしれないよ、その獣がつ！」

優子はその獣の真似をして、まどかに飛びかかる。まどかはそれを避ける力もなく、おとなしく飛びつかれた。

「…ちよつとまどか、あんたやっぱり熱あるよ」

飛びついた優子は、まどかの額に手をやる。

「保健室行って来な。あたし先生に言っておいてあげるから」

「うん……そうする」

「ついて行くごうか？」

「ううん、いいよ。一人で行ける」

まどかは席を立ち、保健室へと向かった。

保健室は隣の校舎にあるため、渡り廊下を通らなければならなかった。

一階まで降りて、渡り廊下を渡れば保健室はすぐだ。

傍に綺麗に整えられた植え込みがあるが、それを眺める余裕もなく、ポーツと前だけを見て歩いていった。

もうすぐ渡り廊下を渡りきる、その時。

『白石…』

「はい？」

呼ばれて振り返ったのに、辺りには誰もいなかった。

(あれ…？ 今確かに声がしたのに…)

おかしい日だ。幻を見たり、幻聴を聞いたり。きっと熱のせいなのだろうと、再び足を前へと進めた、瞬間。

ドウツ！

突然、上空で爆発したかのような音が聞こえてきた。

「なっ、何っ？」

空を見上げると、何かが落ちてくるのが見えた。

(人だ！)

それは植え込みの中に突っ込む。突然の出来事に動けないでいると、今度はセーラー服を着た少女が空から舞い降りてきた。長い黒髪の、美しい少女。

(さっきの人だ！)

それは紛れも無く、登校してきた時に廊下で出会った少女であった。少女はスツと右手を突き出す。すると、どこから現れたのか、白く長いリボンが大蛇のようにシュルシュルと蠢き、植え込みの中に伸びた。

そして、少女がリボンを引き戻すかのように手を引くと、植え込みに落ちてきたと思われる人物が、リボンに巻かれて飛び出してきた。その人物を見て、まどかは「あっ」と声を漏らす。

### 闇姫は笑う 3

「た……卓巳、くん……!?!」

蜘蛛の巣に囚われたようになっていいる人物は、まどかの想い人、西沢卓巳だった。

卓巳は苦しそうに顔を歪めながら、まどかに視線を投げた。

「し……白石……」

助けを求める目だった。しかし、目の前にあるものが何なのか分からず、ただ立ち尽くすことしか出来ない。

「采姫うごき!」

またどこからか違う者の声がした。

すると、少女が上空を見上げた。

そしてにっこりと微笑むと、手にしていたリボンをどこかへと消し去ってしまった。

急に身体が自由になった卓巳は、後ろに引っくり返る。

そんな卓巳に、采姫と呼ばれた少女が近づく。

「また今度遊びましょう」

そして、まどかに顔を向けると、愛らしい笑みを浮かべ、ふうつとその姿を消した。

「……な、なんなの?」

今、目の前に人がいたというのに、その姿はどこにもない。しばらくそのまま呆然と立ち尽くしていたが、地面に蹲る卓巳に気が付き、慌てて駆け寄った。

「卓巳くん、大丈夫？」

声をかけると、卓巳はのろのろと顔を上げた。

「うん、大丈夫。ありがとう白石……君が来てくれなかったら今頃……」

卓巳は地面から立ち上がろうとするが、バランスを崩してまた倒れそうになった。

慌ててまどかは卓巳を支える。

「大丈夫……？」

「うん、ごめん……」

まどかの手を借りて、卓巳はゆっくりと立ち上がる。

一息ついたところで、まどかは改めて卓巳を見た。

パツと見ただけでは怪我はないように見える。

だが、大きく息をつき、支えていなければ立っていられないほど衰弱しているのは、何か大きな衝撃を受けたためだと思われた。

「ねえ、何なの、今の……」

恐る恐る聞いてみる。

「ああ、うん……」



一旦立ち上がった卓巳だが、また地面に座り込んでしまった。それに合わせるようにまどかも姿勢を低くする。

「なんか……あいつら……みたい。あの、事件の犯人……」

「事件……?」

まどかは思い当たる事件がないか、頭を巡らせた。

そして、先程優子から聞いたばかりの獰猛な殺人事件のことを思い出す。

「もしかして、足首だけ残して食い千切られたっていう……」

卓巳は静かに頷いた。

（いやああっ、嘘ー!!）

まどかは頭だけパニック状態に陥る。

「でっ、でもっ、犯人は獣だって言ってたよ!？」

「…あいつ、見ただろ? ……人間じゃないよ」

「……」

確かに。

空に浮かんでいたり、突然消えたりする人間などいない。

（じゃあ、あの綺麗な子が人を食べたっていうの……?）

黒髪を振り乱し、口を鮮血に染め、人の腕や足、胴体に喰らいつく少女の姿を想像して、まどかは震え上がった。

「やだっ……卓巳くん、狙われて…?」

「そうみたい……。また遊ぼうって……また、来るつもりなのかな」

「そんなっ……。じゃあ、警察に！」

「…空飛ぶ人間なんて、信じてくれないよ」

確かにそうだと、まどかは口をつぐむ。

「じゃあ、どうしたら……」

「…いや、さっきは一人でいたから……。みんなと一緒にいれば、あ  
るいは……」

「そっ、そうだよね！ 後は帰りとかだけど……友達とみんなで帰  
れば大丈夫だよ、きつと」

「うん……。ありがとう、白石」

青ざめた顔に、ほんの少しだけ笑みを浮かべて卓巳は言った。

そんな彼の笑顔を見て、まどかは舞い上がりそうになるのを必死に  
堪えた。

「卓巳くん、教室戻ろう」

「うん」

まどかは卓巳に手を貸し、歩き始めた。どうやら先程まであった熱はどこかへ吹き飛んでしまったようだ。恐るべし、恋する女のパワー。

休み時間ギリギリに教室に戻ると、優子が気付いてやってきた。

「どうしたのー？ 保健室行ったんじゃないの？」

「うん、歩いてたら熱下がったみたい」

と言うと、後ろにいた卓巳が「えっ」と呟いた。

「白石、熱あったの？」

## 闇姫は笑う 4

「ううん、全然大したことないの」

「…もしかしたら、保健室に行くところだった？」

「あ……まあ、そうなんだけど、でも、ホント大丈夫だから」

卓巳に余計な心配をかけまいとして、笑顔で平気なところを見せようとする。

だが、その笑顔が凍りついた。

(えっ…?)

教室の中に、クラスメイト以外の姿があるのに気付いたのだ。

しかし、まったく知らないというわけではない。

長い黒髪の美少女が、窓際に立っていた。……そう、先程卓巳を襲っていた少女、采姫だ。

まどかが驚き戸惑っていると、采姫はゆっくりとこちらを見た。まるでまどかの視線に気付いたかのように。

「た、卓巳くんっ……」

小声で卓巳に呼びかける。卓巳は一旦まどかの方を向いて、そしてその視線の先にあるものを見た。

「どっしたの？」

一定の場所を見つめ動かなくなってしまう二人に、優子が呑気に

声をかける。

「ゆっ、ゆうちゃんっ、あれっ……あれえっ……」

「はあ?」

優子がまどかの指差す方向を見ると、そこにいた采姫はにっこりと笑った。そして、こちらにやってきた。

(なんでここにっ)

生徒のフリをして潜り込んできたのだろうか。迂闊だった…。緊張のため手足は冷たくなり、心臓が勢い良く動き出した。

(ど、ど、どうしようっ…)

そう思っていると、優子が意外な言葉を発した。

「なんだ、采姫じゃん」

「えっ!?!」

「何怖い顔して見てんの、二人とも」

(ええええっ!?!)

何が起きたのだ?

良く分からない。

さらに、采姫までもが話しかけてきた。

「ゆうちゃん、まどか戻ってきたの?」

優子ばかりか、まどかの名前まで知っている。まどかはパニックになるばかり。

「うん、そう。熱下がっちゃったんだって」

「ホントに?」

采姫はまどかに近づく。まどかは恐ろしさのあまり、動くことも声を出すことも出来なかった。

「顔色悪いよ? 大丈夫?」

(あんたのせいでしょうっ!)

そう叫びたいのに、叫べない。

「やっぱり保健室行こう、ね?」

「い、い、いよ...」

逃げ腰で言うと、采姫は綺麗な笑顔で更に近づいてきた。

「駄目よ。まどかは頑張り屋さんなんだから。大丈夫、ノートはゆうちゃんがとってくれるから」

「汚いので良けりゃ、いくらでもとってやるわよ」

頼みのつなの優子にはそんなことを言われてしまう。

卓巳の方を見ると、彼もどうしていいのかわからない、という苦渋の表情をしていた。

「じゃあ行こう、まどか」

どこにも隙のない動きで腕をつかまれ、廊下へと誘われる。

（あれ？）

ふわりと軽い感じがした。優しく、労わるような、感じ？

（あれ？）

おかしい。

今までと違う。

怖くない…？

横を歩く采姫をチラリと見る。采姫はその視線に気付き、軽く笑う。そこには卓巳を襲っていた時のような怖い印象はなく、ただの普通の女の子がそこにいた。

（い、いやっ、でも、これは卓巳くんから私を引き離す作戦かもしれないわ！）

きゅつと顔を引き締め、采姫を睨みつける。

するとその顔がおかしかったのか、采姫はプツと吹き出した。

「…な、なによ」

「ふふ、だってかわいいんだもの、貴女」

「…!？」

いきなりそんなことを言われるまどか。

しかし、油断してはいけないと、気を取り直して采姫を睨んだ。

「あ、あなた何者なの？」

「何が？」

「だって！ 卓巳くんを襲ってたじゃない！ ニューズで言ってたあの事件の犯人もあなたなんですよ！？ あっ、あんなふうに空を飛んだり、消えたり、人間じゃないわよ！」



## 闇姫は笑う 5

言った直後に自分の発言を後悔する。わざわざ相手を挑発するようなことを言うなんて。

だが、采姫は別に怒ったりはしなかった。その反対に、にこにここと笑っていた。それがかえって不気味でもあったのだが……。

「なあんだ、いやに西沢卓巳に肩入れするなと思ったら、彼のことが好きだったんだ」

「えっ!?!」

一瞬だけ戸惑う。その隙をついて、采姫はまどかの背中に手をまわし、そこに垂れ下がっている髪をすくい上げた。まどかは身構える。

しかし、何かされるといっわけではなかった。采姫は相変わらず整った顔で笑っていた。

「趣味悪いのね、まどか“ちゃん”」

「えっ?」

「あんなのが好きなんて、物好きい」

(な、にいいい!?)

頭の中で糸が切れる音がした……: ような気がした。

「ちよっと! 何なのよ、あんた!」

まどかは采姫の手を振り払い、叫んだ。

「人殺しのくせに、人の趣味にケチつけないでよねっ！」

そんなことを言っている場合ではなかったのだが、まどかにとつては大好きな卓巳を侮辱されたような気がして、もう采姫を恐怖の対象としては見ていなかった。

「でも、本当のことよ」

采姫は平然として言った。

「かわいいかわいいまどかちゃん。男を見る目はもつと磨いた方がいいよ」

「なっ……」

采姫はトン、と軽く床を蹴ると、ふわりと空中に浮いた。

( ! )

驚いて馬鹿みたいに口を開けて眺めていると、采姫はまたにっこりと笑った。

「また、ね」

その言葉を残して、ふうつと消えてしまった。同時に、まどかの意識はぶつつりと途切れた。

気が付くと家の自分のベッドで寝ていた。

(いつのまに…?)

しばらく考えて、采姫と会話したのが最後だったということを出す。

「そうだわ、あの人に何かされて…」

ガバツと起き上がり時計を見ると、ちょうど十二時を差していた。

「卓巳くんは大丈夫なのかな…」

部屋の明かりをつけ、そつとドアを開ける。階下は真っ暗で、両親はもう眠ってしまったようだ。

静かにドアを閉めると、また部屋の中に戻る。

その時、外で何か光ったのが見えた。

次いで、近所の犬たちがわんわんわん、と連鎖的に吠え出す。

「  
」

何か起きていている気がした。

すぐに窓に近づき、カーテンを引き千切れそうな勢いで開ける。

カッ。

近くでまた何か光った。

ガラツと窓を開けると、真下の木々がガサガサと揺れた。

「白石！」

その声にハツとする。

「卓巳くん!？」

呼び返すと、木の陰から卓巳が姿を見せた。

「どうしたの、卓巳くん!？」

「あいつらが、また…」

会話している間に、また空がカツと光り、まどかの目の前に人が現れた。

まどかの目の前……。

二階の部屋にいる、まどかの目の前。当然、浮いている。

その人物は采姫ではなかった。彼女と同じように、美しい少年だった。

少年はチラリとまどかを見ただけで、すぐに下にいる卓巳に目を向けた。

「ここか、西沢卓巳」

(この声)

最初に采姫に会った時に、その名を呼んでいた声だ。そんなに低くもなく、耳に優しく響いてくる声。

まるで采姫の笑顔のような…。

(同じものだ)

采姫と同質の者。

つまり、卓巳の敵といふこととなる。

## 闇姫は笑う 6

「采姫」

少年が名を呼ぶと、どこからともなく采姫が現れた。

「ありがと、侃耶くなおや>」

采姫は侃耶と呼ばれた少年に抱きつき、微笑んだ。

「もう鬼ごっこは終わりにしよう、卓巳くん」

「…嫌だね!」

卓巳ははっきりと意思表示する。その表情はいつも見ている卓巳のものではなかった。

憎しみのこもった鋭い瞳がとても怖く、まどかの背筋に悪寒が走った。

「そんなことを言っても駄目。まどかちゃんのところに逃げ込もうとしても駄目だよ」

「…っ」

卓巳は采姫と、まどかを交互に見つめる。まどかはそれをオロオロしながら見ていた。

宙に浮いている采姫と侃耶を見ていると、もう現実のような感覚はなく、何故自分がここにいるのかも分からなくなってきた。

それに、卓巳のあの表情…。

何が起きているのか、分からない…。

しばらく沈黙が流れた。

いや、長く感じたただけかもしれない。

ふいに、卓巳が動いた。

地面を蹴り、木に手をかけると、そのまま一気にまどかのいる二階まで跳ぶ。

「　っ!？」

まどかは驚いて声を出すことも出来ない。

卓巳が、采姫たちと同じように、飛んだ…？

「捕まっつてたまるかよ」

卓巳は窓から強引にまどかを引きずり出すと、そのまま空中に浮いて、采姫たちと向き合った。

「卓巳くん…？」

卓巳を見上げる。しかし返ってきたのはいつもの明るい笑顔ではなく、凍りつくような鋭い視線だった。

「まどかちゃんも食べるつもりだったの？」

さらりと采姫がそんなことを口にする。

「…食べるって…あたしを？」

まどかは何となく分かったような気がした。

混乱しているのに、何故か頭の回転だけは早くなっている。まどかはもう一度卓巳を見上げた。

「卓巳くん、あの事件の犯人なの？」

自分でも恐ろしいことを聞いていると思った。しかし、あまりに恐怖が続いたためか、感覚が麻痺していた。

「白石を食べるつもりはなかった。当分は生きられるからな」

冷たい表情のまま、卓巳は答えた。

どういうことだろう…。

「だが見つかってしまったからには仕方がない。奴らから逃げたために、お前に盾になってもらう」

スツと首筋に痛みが走った。それだけで何が起こったかわかる。

おそらく、首筋には横一文字に浅い傷が出来ているのだろう。そして、じわりじわりと血が滲んでいるのも想像できた。

「どうして…」

そう訊いた。

「…あいつも、そう言ったな。どうして貴方が、どうして私を殺すのってね。仕方ないじゃないか。そうしなければ、俺が死んでしま

「でも、人間を殺してはいけないんだよ、卓巳くん」



采姫が口を挟んだ。卓巳は采姫を睨みつけ、まどかの首にあてている短剣をさらに食い込ませた。

「何故だ！ そうしなければ俺たちは生きられない！ それはお前らも同じことだろうに！ 人間たちは俺たちの餌にすぎないんだ！」

「…その通りだけど、私達はね、人間と共存しなければならぬの。それが出来ない人は死ぬしかないの。分かった？」

采姫の顔は相変わらず穏やかな笑みを浮かべていた。

「貴方もこの世界で生きていくことは出来なくなっただわ。だから私が消してあげる」

「出来るもんならやってみる！」

卓巳は短剣を握る手に力を込める。

「こいつも殺してやる！ 人間を護る者がそれを許していいのか！」

卓巳がいきり立つと、采姫はクスツと笑った。

「いいよ、別に」

「」

さすがの卓巳も、その言葉には驚いたようだ。一瞬だけ手が緩む。

## 闇姫は笑う 7

その瞬間。

侃耶が疾風のごとく、卓巳からまどかを奪い取った。あまりにも素早い動きで、まどかは何が起きたのか把握できなかった。

「ばいばい、卓巳くん」

采姫がスツと手をかざすと、白いリボンが飛び出し、卓巳に巻きついた。

卓巳が抵抗する間もなく、白いリボンは真っ赤な炎に包まれ、卓巳ごと燃えていった。

まどかはそれを、呆然としながら眺めていた…。

「大丈夫？ まどかちゃん」

ハッと気が付くと、采姫がまどかの顔を覗き込んでいた。

「あつ、あなつ、あなたたちっ…」

うまく言葉が出てこない。

そんなまどかを見て、采姫は今までで一番優しい笑顔を見せた。

「ふふ、だから言ったでしょ。男を見る目を磨いた方がいいよって」

それがまどかの聞いた、彼女の最後の言葉だった。

采姫は軽やかに宙に舞い上がり、侃耶の手をとって寄り添うように

した後、また風のようにふつつと消えていった。

次の日学校へ行くと、教室の中に采姫の姿はなかった。当然ながら、卓巳の姿もない。

何度も夢の中の出来事だと思った。

卓巳が人を食べたことも、采姫という少女がいたことも、采姫に卓巳が殺されてしまったということも。

しかし、首に残った傷が、あれは夢でなかったことを証明している。

「どうしたの、ブーツとして」

優子が話しかけてくる。

「うん……。あたしさ……。失恋しちゃったんだあ」

「ええ？ 卓巳くん？ ……急に転校しちゃったから、それで？」

いつのまにかそういう話になっていたのか……。と、まどかはすんなりとその話を受け入れる。

「うん…」

「あらあ……。それは……。残念だったわね」

声の大きい優子が、めずらしく静かに言った。

（失恋……。なのかな……。変な失恋……。）

悲しいのか、そうでないのか、良く分からない。変なことが一気に通り過ぎて、頭の整理が出来ていないのかもかもしれない。

「ゆうちゃん、采姫って何だったんだろっね…」

あの髪の長い美少女と、それに寄り添うようにしていた少年、侃耶。あの二人は何者だったのだろう。

「…サイキって誰？」

「え？」

優子はきょとんとしてまどかを見ている。

「…分からない？」

「うん。誰よ？」

「……」

優子たちに植え付けた記憶は、綺麗に消え去ってしまったようだ。

「…うつん、何でもないよ」

采姫たちを知っているのが自分だけだと知り、まどかは妙に安心してしまった。

誰も知らない存在。きっと、彼女たちはそれでいいのだ。

(でも、どうせならあたしの記憶も消してくれたら良かったのに)

こんな混乱したまま放っていくなんて。失恋の痛みも残されて……。

「……………」

まどかは采姫の台詞を思い出す。

『男を見る目を磨いた方がいいよ』……………。

昨日の経験を忘れず、精進しろと言っことだろうか。

「それにしても酷い教訓……………」

まどかは頬を膨らませた。

そして、もう二度と会うことはないであろう、あの美少女に思いっきり「あっかんべー」をするのであった。

孤高の月 1

闇夜に浮かぶ

上弦の月

太陽の熱に焦がれる

私は ひとり

『孤高の月』

真夜中。空の天辺には綺麗な上弦の月が出ている。

采姫さいきはバルコニーの手摺りに座り、その月を眺めていた。

「きれいだね」

隣に立っている侃耶なやを振り返り、言う。侃耶はチラリと采姫に目をやり、また視線を正面に戻した。

「ああ……」

「こんなに綺麗な月、久しぶりだね」

明るい声で語りかけてくる采姫を、侃耶はもう一度見る。

「……采姫」

無表情なそれは先程から変わってはいない。が、采姫には彼の怒りが伝わった。

「そんなに怖い顔しなくて、分かってるよ」

両脚をパタパタと揺らし、少し拗ねてみせる。

「こつこつという綺麗な月が出てるっていうのに、ゆっくり鑑賞も出来ないね」

「終わったら、ゆっくり出来るよ」

侃耶は采姫に手を伸ばした。

「そう、かな」

あまり気が乗らなそうに、采姫はその手を取る。

「早く終わらせる」

「ホント？」

「ああ」

「じゃあ、私も頑張るね」

采姫に笑顔が戻ると、侃耶も僅かに笑みを浮かべた。  
直後。

2人の姿は風のようにフウ、と消えていた。

鬱蒼と木々の茂る森の奥で、中学生くらいの髪の短い少年が息を切らしながら走っていた。彼を追いかける　化け物から逃げるために。

「待て！」

少年の後ろから追いかけてくるのは、同じ年頃の少年だった。

「いつ、いい、嫌だっ！！」

足をもつらせながらも懸命に走る少年の前に、別な人影が現れた。  
その人物も、少年らと同じ年頃の少女だった。

足を止めた少年に、少女は勝ち誇ったかのように微笑む。

少年は後ずさりするが、後ろから追いかけてきたもう1人に遮られ、逃げ道を失った。

「井澤くん。申し訳ないけど……君を殺すよ」

後ろから追いかけてきた少年は、静かにそう言った。



「いい、嫌だっ！ 何でお前らが……何で僕が殺されなくちゃならないんだっ！」

井澤は必死に訴える。

少年の表情が僅かに陰った。

「……ごめん。でも、生きるためなんだ……。本当にごめん……」

井澤に謝る少年を見て、少女が怒鳴った。

「何生ぬるい事言ってるのよ！ さっさとしないと“ヤツラ”が来ちゃうんだから！ ……カイ、いいわね？」

少女が睨みつけると、少年は戸惑いながらも、頷いた。

そうして2人が井澤を挟み込み、飛び掛ろうとした時だった。

「あーあ、弱い者いじめして、いけないんだ」

上空からかわいらしい少女の声が降ってきた。

2人が見上げると、背の高い木の枝に長い黒髪の美少女 采姫が、ちよこんと腰掛けていた。

「誰だ！？」

少年、カイが怒鳴ると、采姫はクスリと笑った。

「駄目よ、カイくんにミキちゃん。人間を食べちゃ駄目だって、知ってるでしょ？」

そう言いながら、ふわり、と跳んで地面に降り立つ。カイが、采姫

の姿を見て驚愕した。

「まさか……監視者!?!」

「はあい、そうです」

クスクス笑いながら、采姫は井澤に近づく。

「ほら、早く逃げた方がいいんじゃない?」

「あ……わああっ」

井澤は何度も転びそうになりながらも、一目散に逃げていった。それを追いかけてよとした少女、ミキの前には侃耶が立ちふさがる。

「こ、こんなに早く見つかるなんて……!」

ミキは悔しそうに侃耶を睨む。

「ごめんねえ。でも、そんなにコワイ顔してたら、すぐに分かったやうよ?」

ミキは楽しそうに言う采姫を振り返り、さらに睨み付けた。

「貴方達、まだ未遂だから、選択肢は残ってるよ? みんなの所に帰るか、それとも私達の手にかかるか……ね。どうする?」

「か、監視者!」

カイが一步前が出る。

「なあに？」

「……里に帰るよ。だから……」

「カイ！ 何言ってるのよ！」

ミキはカイの腕を引っ張る。

「このままじゃあたし達死んじゃうのよ！ ……あたしは嫌！ あたしは、まだ生きたい！」

そう言っつて、ミキは采姫に飛び掛る。

「ミキ！」

ミキを止めようとカイは手を伸ばしたが、その手を振り払い、再度采姫に飛び掛った。

采姫はニコニコと笑いながらミキを迎える。

そして眼前まで詰め寄られて、ようやく右手を掲げた。

そこから飛び出した白く長いリボンに、ミキの体はあっという間に縛り上げられる。

「あああっ！」

ミキが苦痛の声を上げる。

「ミキ！」

ミキを助けようと思ったのか、おとなしく降るはずだったカイまで

もが采姫に襲い掛かろうとした。  
だが。

カイは采姫に向かっていこうとした瞬間に、  
侃耶に斬り捨てられた。  
ほんのりと青く光る日本刀で。

「カイっ……カイ　　！！」

ミキが絶叫する。

## 孤高の月 2

「どうして、そんな悲しそうな顔をするの？」

采姫が静かに問いかける。

「私達に向かってくるということは、こうなることだって。解ってたんでしょ？」

「……………あんたになんか解らないわ！」

ミキはギツと采姫を睨んだ。

「こんな辺境の地で、寿命を縮めて生きなくてはならないあたし達の気持ちなんて！……………あんたには解らないっ！」

「……………」

「あたしは……………あたしとカイは、ただ生きてかっただけなのにつ……………。

この世界でやっとなんか生きる目的を見つけたのに、どうして死ななくちゃならないのよ！

人だっってお互いを殺し合ったりするのよ！？ あたし達が1人、2人殺そうが大して変わりないじゃない！」

「でも、それは人を殺していい理由になるの？」

「何っ……………」

「人だって、生きているんだよ。私達と同じように。なのに、私達の都合で殺してしまっても、いいの？」

「だって……あたしは生きたいもの！」

「……勝手だね」

「そうよ、勝手よ！ 何と言われようが、あたしは生きたかった！」

ミキは、斬られてしまったカイを振り返り、目を細める。

「カイと一緒に……生きたかった」

それを聞いて、采姫は微笑する。

「じゃあ、もう生きなくてもいいじゃない」

ミキは強張った顔を采姫に向ける。

「カイはもう天に還ったよ。貴女も還ろう？」

「あなた……あなたには感情ってモンがないの……？」

信じられない思いで采姫を見つめる。

「最低……！ 監視者がこんな冷酷なヤツだなんて……。あたし達と同じ仲間だなんて、信じられない！」

采姫のリボンを持つ手に力がこもる。

「あんだなんか仲間じゃない！ 監視者なんかっ……」

ミキの言葉はそれ以上続かなかった。

采姫の創り出した真っ赤な炎がリボンを伝ってミキに燃え移ったのだ。

「いやあああっ………！」

ミキの断末魔の叫びが響き渡る。

「あんだなんかにつ……あたし達の気持ちも解らないヤツに殺されるなんて、いやああっ………！」

炎の中で泣き叫ぶミキ。

それを静かに微笑みながら、采姫は眺めていた……。

上弦の月は、やや西に傾いていた。

采姫はそれを見上げ、そして地面に目を落とした。

「貴女が悪いんだよ」

既に灰となって消えてしまったミキに、そう言う。

「貴女が、悪いの……」

「采姫」

後ろから、静かに名を呼ぶ声がする。

采姫は振り返り、侃耶の元にゆっくりと歩いていった。そして首に手を回して抱きつく。

「彼女達には采姫の気持ちは解らないさ」

耳元で優しい声が響く。

「……解ってたまるもんか」

つん、と澄まして采姫は呟いた。

「侃耶だけ、解ってくればいいもん……」

侃耶の肩越しに、また月を仰ぐ。

上弦の月は、優しい光で2人を照らしていた。

「侃耶、私、月は好きだよ」

采姫は呟く。

「綺麗なものは大好き。でも、ね……」

月は広い天に独りぼっちで寂しそうね。  
私と同じなの。

だから、少し……嫌いだな……。



その呟きを聞いて、侃耶は僅かに微笑んだ。

「采姫は月じゃない。采姫は1人じゃないだろう？」

それを聞いて、采姫は満足そうに微笑む。侃耶から離れ、ジッと目を見て頷いた。

「うん。……帰ろう、侃耶」

と、手を差し出す。

侃耶はごく自然にその手を取り、そのまま2人並んで歩き出した。

「……ずっと傍にいてね」

「ああ」

ずっと傍にいてね。

それは、遠い日の約束。



あなたに逢えて良かった 1

愛すること

それは素敵なことだけれど

いつかは泡となって消えてしまう

儚いもの

それでも 信じてみたい

“永遠”があることを

『あなたに逢えて良かった』

『永遠』なんて きっと幻

それでも信じていたい キミを愛してるから…

コッソ、とシャープペンシルを机の上に置いて、少年は顔を上げた。カーテンの間隙から覗く満月。

その光を浴びようと、徐に椅子から立ち上がり、静かにカーテンを開けた。

輪郭のはつきりしない、滲んだ光だ。

闇夜にぼんやりと浮かぶ満月は、まるで自分の心のようにだと思った。満たされているはずなのに、はつきりとした手ごたえが感じられない。どんな星より輝いているのに、その存在は危うげで、儂い。

両の手のひらを広げて、そこに目を落とす。

時が近い…。

それはもう、目前まで迫っている。

彼に残された選択肢は。

“生”か、“死”か。

雨が降っていた。

大雨でもなく、小雨でもなく。しとしと、夕べからずっと振り続けている。

ニュースでは各地の降水量を伝えていて、この地域が一番多く降っているようだった。梅雨特有の蒸し暑さが全身を包む。7月上旬。

大型のブラウン管テレビと、部屋の隅に置かれた背の高い観葉植物。白のカバーがかけられたソファに、白いクッションが2つ。少し殺

風景な感じのするフローリングの部屋の中。

采姫はクッションを抱いてソファに座り、テレビを眺めていた。

「梅雨、かあ…。ベトベトするって気持ち悪いのかな」

「さあな」

背後から侃耶の声が返る。

「人間は大変だよな。暑かったり寒かったりしてさ」

クッションを抱いたまま体を反転させ、侃耶を見る。同時に、侃耶も振り返った。

采姫の艶のある長い黒髪が、サラサラと肩から流れていくのを目に留めた侃耶は、そつと黒髪に手を伸ばした。

「暑さを感じれば、この髪も項に張り付いて邪魔だろうな」

その言葉に、采姫は口を尖らせる。

「いいもん。その時はアップにするから！」

子供染みた表情に、侃耶はクスリと笑う。

そんな彼が憎らしくて、白いシャツにかかっている紺色のネクタイを引っ張る。

バランスを崩した侃耶は、左手をソファに、右手を采姫の髪から背中中に回した。

采姫は右手を侃耶の首に回すと、その肩に顔を埋めた。

「…あつたかい」

侃耶の体温が心地いい。触れれば伝わる優しい温度。

「侃耶の体温なら感じるのに。……同じように気温も感じられたら、もう少し生きてるって実感出来るかなって、思ったの」

侃耶は目線だけを動かし、采姫を見る。

この体勢では表情が見えない。しかし、彼女がどんな顔をしているかなど、手に取るように解って。

優しく、髪を撫でてやった。

さらさらと。

静かに髪が揺れる。

その心地良さに采姫は目を閉じ、指先から、肩から伝わる温もりを感じた。

「……そろそろ時間だな」

侃耶の声に、采姫はのろのろと顔を上げる。そして笑った。

「うん」

そうして立ち上がり、テレビのリモコンに手を伸ばしかけて顔を上げた。

テレビ画面の中から、若草色のスーツに身を包んだ女性リポーターが、高層マンションの前で言葉を伝えている。

『こちらは、今若者に大人気の歌手、宗谷狭霧くそうや さざりくさんの自宅マンションです。行方不明との情報を得、多くの報道陣が集まっています』

画面は何人ものリポーターと何台ものカメラの映像に切り替わる。その様子を映し出した後、すぐに女性リポーターが映り、歩きながら詳細を伝え始めた。

『宗谷さんは今月7日からテレビ、ラジオ等にまったく姿を見せていません。このことに対し、事務所側は……』

プツン。

テレビが消えた。

采姫は軽く溜息をつく。

「呼んでるね」

と、侃耶を振り返る。

「…学校、今日は行けない、かな」

「仕方ないだろう」

「つまんないの」

更に深く溜息をつく。

少し頬を膨らませながら侃耶の腕に自分の腕を絡ませ、足早に歩き出す。

2人の姿は、窓際から煙のように、消えていなくなった…。

行方不明とされている宗谷狭霧は、去年メジャーデビューしたばかりの新人歌手だ。

だが飛び抜けた歌唱力と若者の心を掴む楽曲、それに彼の持つカリスマ性は、まさにアーティストとしては最高の逸材だった。

デビュー曲でいきなりその年一番の売り上げを記録。続く2曲目、3曲目ともに首位を独走。あっという間にトップアーティストの座に登りつめた。

その宗谷狭霧が失踪となれば、世間が大騒ぎになることは目に見えていた。それは狭霧自身も良く承知している。

それでも、失踪せざるを得なかった。彼には、死期が迫っていたのだから…。

人の寄り付かない山の中で、狭霧は待っていた。

死期の近づいた自分を、天へと還してくれる人物を。

その人物は仲間に“監視者”と呼ばれている。

掟を破る者には容赦なく制裁を下す、冷徹無比の恐ろしい存在。

どんな存在でも構わない。

ただ、安らぎが欲しかった。

一刻も早く…。

「ここにいたの？」

ふと、少女の声があった。

ハツとして顔を上げると、いつの間にか目の前に黒髪の美少女が優



しい笑みを浮かべて立っていた。

「君は…？」

「貴方が呼んだ者だよ。狹霧くん」

「……貴女が、監視者……」

狹霧は驚きを隠せない。

まさかこのように華奢な美少女が、冷徹な笑みで仲間達に罰を下す監視者だとは。

もっと冷たく鋭い瞳をした、飢えた獣のような人物だと思っていたのに…。

「どうかした？」

采姫は首を傾げる。そんな姿も愛らしく、狹霧は軽く頭を振った。

「いや…。まさか、監視者がこんなかわいい子だとは思わなくて…」

「そう？」

采姫は表情を変えることなく、後ろを振り返った。

「だって。変な人だね」

クスリと笑いながら話しかけたのは、少し離れたところにある大木の幹に寄りかかりこちらを見ている侃耶。

その姿を見て、狹霧は更に驚く。

「監視者は、2人だったのか…」

「そうだよ。知らなかった？」

「うん…」

素直に頷く狭霧を見て、采姫は人差し指を唇に当てた。

「ねえ？ どうして私達を呼んだの？ 狭霧くんは人を殺したわけでもないし、もう少し寿命残ってるみたいだけど？」

「ああ……うん」

狭霧は一度地面に目を落としてから、何かを決意したように顔を上げた。

「俺を……殺して欲しい」

その言葉に、采姫から笑顔が消えた。

「どういうこと？」

「このまま寿命まで生きていると……多分、人を殺したくなる。…  
…生きたいと願ってしまふ。だから、そうなる前に、殺して欲しい」

悲愴な面持ちで真剣に訴える狭霧。

それに、采姫は無表情で答えた。

「嫌」

短く、きつぱりと。力強く言い放つ。

「何故！ 狂気に走る前に、止めて欲しいんだ！」

「嫌」

またしても、采姫は狭霧を突っぱねる。

「私達は、人殺しじゃないの」

狭霧はハツとする。

「勘違いしないで。監視者は、あくまで“禁を犯した者”に制裁を加えるの。無意味な狩りはしないの」

「……そう、か……」

目を伏せて、大きく息を吐き出す。

もし聞き及んだ通り冷徹無比な人物だったなら、もしかしたらこの願いを聞き届けてくれたのかもしれない。

しかし予想に反したこのかわいらしい監視者は、その綺麗な面差しに良く似た美しくまっすぐな心で、監視者という立場にいるようだ。

このままでは……願いは聞き入れてもらえない。

ならば “禁を犯す” しか、ないだろう……。

伏せていた瞳にキラリと光を灯すと、短く息を吐き出し、素早く手を伸ばした。采姫の喉下に。

しかし、その手は采姫の白く細い首に触れることなく、パシン、と弾かれた。

いつの間にか、目の前には侃耶が立っていた。  
特に慌てる風でもなく、ただ静かに、長めの前髪から涼しげな目元を覗かせて。

「ざんねん」

侃耶の横から、采姫がひよこつと顔を出す。

「“フリ”じゃあ、殺さないよ」

見透かされた。

狭霧は、伸ばした手に握りこぶしを作ると、それを静かに下ろした。

「ねえ、狭霧くん」

采姫が静かに語りかけてくる。

「貴方、優しくすぎて人を殺せないよ。……自分で死ぬことも出来ないんでしょう？ だったら……後悔しないように、したら？」

「…後悔、しないように…」

狭霧は、采姫の言葉を繰り返す。

そして、狭霧は2人に背を向けて歩き出した。  
侃耶はチラリと采姫を見る。

「……いいのか？」

「うん」

采姫はかわいらしい笑みを浮かべて、侃耶を見る。

「人を食べない保障はないぞ」

「大丈夫だよ。狭霧くんには、大切な人がいるみたいだから」

「だからこそ、狂気に走る己を恐れていた」

「……じゃあ、見守ってればいいでしょう？」

少し拗ねたように、采姫は前を歩き出す。侃耶もそれを追いつき、やがて山中から2人の姿は消えた…。

あなたに逢えて良かった 2

後悔、しないように……。

采姫の声を耳に残し、狭霧は大きな総合病院の前に立っていた。すっかり夜闇に覆われた建物の窓からは、ほとんど灯りが見えなかった。

もう二度と逢うことはないだろう。

そう覚悟を決めていたはずの相手。

それがまたこうして逢うことになるうとは……。

狭霧はフ、と笑みを溢して、病院内へ入っていった。

照明の落ちた静かな病棟の廊下。

唯一煌々とした明かりの灯るナースステーションを足早に抜け、そこからすぐの病室の前に立つ。

『305号室 日比野彩子』

名前を確認して、そつとドアを開けた。

消灯時間を過ぎているため、部屋の中は真っ暗だ。しかし、半分しか引かれていないカーテンのおかげで、満月の光が狭霧を導く。

部屋にひとつしかないベッドの中に、月光に見守られるように眠る少女。

穏やかな寝顔だ……。

狭霧は優しい微笑を浮かべ、少女の頬に触れた。

「……………あや」

そつと、名を呼ぶ。

少女、彩子は少し身動きした後、ふっ、と目を開けた。  
月光の青白い光を背に受け、立っている人物を視界に入れる。

「狭霧……………」

そう呟いた後。

「狭霧!?!」

頭を覚醒させ、ガバツと飛び起きた。

「どうしてっ……………貴方、行方不明って、テレビでっ……………」

狭霧に飛びついてベッドから落ちそうになる彩子。そんな彼女の肩にそつと手を置き、狭霧は微笑んだ。

「うん、ちょっとね。……………でも帰ってきたんだ」

「どういう、こと? どこに行ってたの?」

それには狭霧は答えず、ただ微笑みを浮かべた。  
彩子の細い肩から手を離し、青白く光る白く細い手を両手で包み込んだ。それを額に持っていき、静かに目を閉じる。

「狭霧…？」

戸惑う彼女の声に聞こえないフリをして、しばらくそのまま手を握っていた。

そうしていると、彼女の温もりとともに、思い出が蘇ってくる。

一年前。

まだデビューしたての頃に、夏のチャリティー番組で知り合った彩子。

『みんなに勇気を』

そういうコンセプトで骨髄移植を待つ、白血病を患う少女の取材を命じられた。

同じ年頃の女の子が、幾度と無く訪れる死の恐怖と戦い、病気を克服していく。

その頃の彩子は移植のため、抗がん剤を投与され、体はやせ細り顔色も悪く、髪の毛も抜けてしまっていた。

そんな姿を全国に晒すのか。

初めはそう思った。

けれど彩子は笑っていた。

『私の姿を見て、少しでも同じ病氣の人が元気になってくれたら』

と。



その時の笑顔が今でも目に焼きついて離れない。  
もしかしたら、天に召されてしまうかもしれない。そんな恐怖を味  
わいながらも、強く、健気に生きている彩子。  
そんな彼女に惹かれるのに時間はかからなかった。

誰よりも強く。

誰よりも美しい。

彩子。

そんな君を神様は見ていたんだろう。

彩子の手をそつと離し、狭霧はまた微笑んだ。

「あや、体調はどう?」

「うん、凄くいいよ。来週には退院出来るって……」

「そう、良かった」

「ねえ、どうしたの? 今日の狭霧、変だよ……」

言葉が続けようとする彩子の口到人差し指を当て、黙らせる。

「……あや。屋上、行こっか」

優しく手を引き、彩子を屋上まで誘導する。

屋上へ続く重々しいドアを開けると、湿気のある強めの風が舞い込  
んできた。

「今朝まで雨降ってたから、凄い湿気だね」

風から顔を背けるようにして、彩子は屋上を少しずつつ歩いていく。湿り気を帯びているとはいえ、まだ梅雨明け前。夜の風は彩子には冷たいだろう。

狭霧は辺りを見渡すと、物干し竿に取り込み忘れたシーツが1枚、風になびいているのを見つけた。

「これでいいかな」

パリッとした真っ白なシーツを、彩子の肩に乗せる。彩子はふふつと笑った。

「なんか色気ないね」

「しょうがないだろう？ 俺、Tシャツだし」

と、ダークグリーンのTシャツの裾を掴んでみせる。

「そうだね。それ脱いたら裸になっちゃうもんね」

「あら、彩子さんってば、エッチですねー」

「もっつ、何よう」

ぶくつと頬を膨らませる彩子を見て、狭霧は笑った。彩子も笑った。

いつもの狭霧だ。そう、思ってた。

屋上に設置されているベンチに腰を下ろし、2人で空を眺める。

「綺麗な月……」

静かに白く輝く月は、丁度天辺にあった。

その光を受け、彩子の白い肌が輝く。その横顔に見惚れていることに気付いて　　パツと視線を月へ向けた。

「あや……」

「うん？」

「俺……ね。あやのために歌作ってたんだ」

「私のために？」

彩子は月から狭霧へと目を転じる。

「退院祝いにとと思って。……バラードって初めてで、詩をどう書いていいのかわからなくて、まだ曲しか出来てないんだけど……」

「嘘、聴きたい！」

彩子の瞳がキラキラ輝く。

それに目を細め、狭霧は立ち上がった。

「では、ご清聴下さいませ」

彩子に向き直り、深々と頭を下げる。

顔を上げて彩子の顔を見てから、すつと息を吸い込んだ。

静かにメロデーは流れ出す。  
穏やかに、けれど力強く、音を紡ぎ出す。  
低すぎない少年の声で。流れる旋律は月に向かって、ゆっくりと、  
溶けていった……。

狭霧の声が止んで。  
しばらく、静寂が2人を包んだ。

「……凄い」

ほう、という溜息と共に、彩子が呟いた。

「凄い、狭霧！ 歌詞なくても泣いちゃう！」  
目に溜まった涙を拭い、手を叩いた。

「ありがとうございます」

狭霧はペコリと頭を下げる。

「ちゃんと完成してから聞かせてあげたかったけど、その自信がな  
かったから、先に歌ってみたんだ」

「え？」

その意味が分からず、彩子は小首を傾げた。

「……」

月明かりに照らされた、彩子の美しい首筋。  
それに貪り付いて、甘美なる血肉をこの身に受け入れたなら 彼  
女と一緒に、監視者に狩られる……。  
永遠に、傍に、いられる。

狭霧は彩子に抱きついて、肩に顔を埋めた。

そんな妄執に取り付かれてしまえば良かった。  
そうすれば、ある意味幸せに逝けただろうに。  
けれど……この腕の中にすっぽりと収まってしまつ少女を汚す事な  
ど、出来なかった。

「狭霧？」

彩子の温かい手が背中に回される。

『後悔、しないように』

その温もりを全身で感じ取り、狭霧は口を開いた。

「歌が完成したら、あやのために歌うから」

ぎゅっと、強く細い体を抱きしめる。

「もし……俺が、それまで生きていたら」

「狭霧？」

彩子の意識は急速に薄れていき　気が付いたら、朝日の差し込む病室のベッドに横になっていた。月の光の中の出来事は、まるで夢のようで…。一瞬だけ、狭霧も幻だったのだと思った。けれど、起き上がって布団の上にところどころ汚れたシーツが一枚置いてあるのを見て、やはり夢ではなかったと確信した。

「狭霧…？」

どこに行ったのだろうか。ベッドから降りてスリッパを履くと、そっとドアを開けてみた。ひやりとした廊下に出て、斜め向かいにあるナースステーションを覗いて見る。

朝の検温の準備をしている看護師達がいそいそと動き回っていた。

「あら、彩子ちゃん」

看護師の1人が彩子に気付き、声をかけてくれた。

「おはよう、早いわね。ここで検温していく？」

「はい…」

「じゃ、これお願いね」

渡された体温計を脇の下に挟み、用意してくれたパイプ椅子に座る。何人かの看護師が挨拶をしてくれ、温かいお茶を出してくれた。アラーム音が鳴ったので体温計を外し、それを看護師に渡す。

もらったお茶に手を伸ばしたところで　奥にある小さなブラウン

管テレビの音が耳に届いた。

『昨晚発表された、歌手、宗谷狭霧さんの引退宣言について……』  
ガタン！

勢いよく立ち上がったせいで、パイプ椅子が激しく音を立てた。  
奥にある看護師達の休憩所に入るのは躊躇われ、急いで自分の病室  
に戻り、備え付けのテレビのスイッチを入れた。

早朝のニュースのせいか、伝えるキャスターの言葉は淡々としてい  
た。  
けれども、彩子にはそれでも十分な衝撃だった。

『宗谷狭霧 引退』

画面の右下に映し出されるテロップの文字。

昨日どこか様子のおかしかった狭霧。

どうしてもっと良く話を聞かなかったんだろう。

様子が変だと気付いていたのに！

両手をギュッと握り締め、彩子はテレビにかじり付いていた…。

### あなたに逢えて良かった 3

一週間後。

予定通り退院となった彩子は、両親に迎えに来てもらい自宅へと戻った。

あれからニュースやワイドショーでは狭霧の引退宣言の話題で持ちきりだった。

引退宣言の後、更にまた行方をくらましたものだから、余計に騒ぎ立てるのだろう。

「どこ行っちゃったんだろ…」

折角の退院だというのに、両親の呼びかけにもほとんど上の空。

彩子の顔からは笑顔が消えてしまっていた…。

自宅について、家の中に入っていく。

懐かしいのだが、病院生活が長かったせいも他人の家に入りこむ心地だった。

荷物を置きに自室に入ってもそれは同じで。何だか室内が狭く見えただ。

白いポストンバッグをドサリと床に置いて、ふと、机の上に置かれた何通もの手紙が目がいく。

友人達からの励ましの手紙は、いつも母が持って来てくれていた。しかしこれは通信販売などのダイレクトメールのようだ。母が特別見せる必要は無いと判断し、ここに置いてくれていたのだろう。

何気なしにそれを手にし、一通一通確認していると。



ひらり、と白い封筒が舞い落ちた。  
何も考えずにそれを拾い上げる。

何も書かれていない、ただの真っ白な封筒。裏返してみても何も書いてない。

「なんだろ」

封を開き、中身を確認する。

かさり…。

紙が擦れて小さな音を立てた。

中に入っていたのは、1枚の紙切れ。

真っ白な長方形の紙に、シンプルな黒のペンで書かれた文字。

それを見た瞬間、彩子はその紙を握り締め、部屋を飛び出した。そしてそのまま玄関へ向かう。

玄関のドアを思い切り開けたところに。

狭霧が立っていた。

「！」

驚きのあまり声が出ない。

口を開けたまま硬直している彩子に、狭霧はにっこりと微笑みかける。

「あや、迎えに来たよ」

彩子が先程手にした紙には。

『ラストライブを行います。今迎えに行くから、来てください』

そう、書かれていた。  
そしてその通りに目の前に狭霧がいる。彩子が驚くのも無理は無かった。

目を瞬かせる彩子の手を優しく取り、「どうぞ」とエスコートされる。

その手に導かれるように一歩踏み出すと、一瞬にして辺りは暗闇に覆われた。狭霧の手の温もりが消える。

「狭霧!？」

不安になって声を上げる。

すると、少し離れたところにスポットライトのような光が浮かび上がった。そこに狭霧の姿が現れる。

光の中に狭霧が現れたことに安堵し、辺りにチラチラと目を走らせる。

薄暗いけれど、そこは学校の教室くらいのさほど広くない空間で、狭霧が立っているところは少し高い……壇になっていることが分かった。

足をずらせば、カッン、と靴音が響く。

「……」

狭霧に問いかける。

『俺がデビュー前に歌ってたライブハウスだよ』

狭霧の前にはマイクスタンドがあり、マイクを通した声は辺りに反

響した。

『あや、座って』

見ると、すぐ横に背もたれのついた椅子が置いてあった。

彩子は狭霧の言う通り、ゆっくりとした動作で椅子に浅く腰掛ける。それを確認して、狭霧はマイクを持ち直す。

『あや、退院おめでとう。この間の曲、やっと完成したんだ。今日はそれを聴かせたいと思って』

その言葉に、彩子の顔に笑みが広がる。

そして大きく頷いた。

『本当は、色々歌ってあげたかったけど、もう時間が残ってなくて……ごめんね』

今度は首を傾げる彩子に、狭霧は弱々しい笑みを浮かべる。

『俺ね。小さい頃から歌うのが好きで、それで誰かに喜んでもらえるのが好きだった。ただ楽しくてここで歌ってた時に、今の事務所からスカウトされて、それでデビューしたんだ』

その辺の件は彩子も知っている。小さく頷きながら狭霧の話の聞いた。

『でも俺の時間が限られてるのは知ってたから……このまま流されるように歌わされてもいいのかなって、ずっと思ってた。』

そんな時に、あやに出合った。……今思い返しても衝撃的だったな。まっすぐに前を見据えて、病氣と戦ってるあやが。俺にはない輝き

を持っていた、あやが…』

彩子は「そんなことないよ」と言うように、首を横に振った。輝いていたのは狭霧の方。

ずっと懂れていたテレビの中の少年が目の前に現れた時の心の高鳴りは、今でも忘れられない。

『俺に力をくれて、ありがとう。あやに出会えたから、今まで歌ってこれた。……最後まで歌わせてくれて、ありがとう』

優しく彩子を見つめるその瞳から、一粒の雫が零れ落ちた。

『ありがとう……』

僅かな間、狭霧は首を項垂れた。

それから横に歩いていき、壇上に置いてあったグランドピアノの前に座った。

ギチツと椅子が音を立てる。

スツと背を正して、ゆっくりとした動きで鍵盤の上に長い指先を乗せた。

スポットライトの光のせいなのか　その横顔はあまりにも蒼白で、思わず彩子は立ち上がった。

そこで、ポン、とピアノが鳴り出す。

静かに、流れるように美しい旋律が紡がれ出した。彩子は胸のところで両手を握り締め、狭霧を見つめる。

僅かに体を揺らしながらピアノを鳴らす狭霧。

水の中をたゆたうように滑らかに。そして美しく。

力強い声が、美しい旋律に乗って響き渡った。

この想いを  
恋と呼ぶには切なすぎて  
願ってしまふ  
キミと在る永遠

ねえ 時がふたりを引き離しても  
いつかまた巡りあうから  
泣かないでいて  
愛しい人

『永遠』なんて きっと夢  
それでも信じていたい  
キミがここにいるから

この想いを  
恋と呼ぶには愛しすぎて  
祈ってしまう  
終焉おわりのない永遠

ねえ キミがくれた愛が何度も  
ボクを救ってくれていたから  
この命尽きても  
怖くはないよ

『永遠』なんて きっと幻  
それでも信じていたい  
キミを愛しているから

ねえ いつか来る終焉おわりを感じながら  
愛せるよろこびを知ったから  
心から微笑わらえる  
幸せだよと

『永遠』なんて 幻でいい  
愛した記憶は  
キミとボクに在るから…

力強い歌声は余韻を残し、静かに消えていくピアノ音に溶けていった。  
やがてその音も彩子を包み込むようにして 消えた。狭霧の優しく温かな想いに包まれた気がした……。

ガタン！

突然の大きな音に、彩子はビクツと身を震わせて目を開いた。  
先程までピアノを弾いていた狭霧は、そのピアノの足元に倒れていた。

「……………狭霧？」

すぐには何が起きたのか分からなかった。  
狭霧が……………倒れた。

「狭霧！」

ようやく事態を呑み込んで、彩子は慌てて壇上に上がった。

「狭霧っ！」

倒れた狭霧の顔は青白かった。スポットライトのせいなんかじゃない。それはまるで、死人のように……。

「どうしたの！？ ねえ！」

体を揺さぶっても、何の反応もない。ゴトン、とやけに大きな音を立てて、狭霧の大きな手が床に落ちた。その手を両手で包み込む。

冷たい。

狭霧の手は、こんなに冷たかった？  
戸惑いながら、その顔を目にする。  
穏やかな 微笑を湛えていた。  
それを見た瞬間に、体中が震えだす。

「狭霧……？」

静かに名を呼ぶ。何の応えも返らない。そこへ突然、狭霧の額に細く、白い手が乗った。

顔を上げると、いつの間ここに来たのか、長い黒髪の間を見張るような美少女が座り込んでいた。  
慈しむ様な穏やかな瞳で狭霧を見ている。

「……還ろっか」

鈴の音のような綺麗でかわいらしい声が響く。

狭霧の体はそれに反応するかのように淡い光を放ち、やがて全身がそれに包まれ……空気の中に融けるように消えてなくなった。

それを啞然をして眺めていた彩子は……目の前にいる美少女に目を向けた。

「何、を……」

言葉が続かない。

そんな彩子に、少女、采姫は優しく微笑む。

「狭霧くんは……天に還ったの。……最後まで体が保たない時は、ちゃんと貴女を家まで送り届けるように頼まれてんだ」

采姫の言っていることが、まったく頭の中に入っていない。  
何を言われているのか解らない。

「狭霧は!?!」

そう叫んで采姫に飛び掛かる。

彼女は少し眉尻を下げて悲しそうな顔をし、首を横に振った。

「解る……でしょ?」

その言葉に、今度は彩子が大きく首を振る。

「ねえ、狭霧に何をしたの!?! どこにやったの!?! 狭霧を返して! 返してっ……!!」



どん、どん、と拳で采姫の胸を叩く。  
両手で二度叩いたら、やんわりと手を掴まれた。  
そこから伝わる温かさにハツとする。

彩子の手をそつと窘める、侃耶の静かな表情が目映る。  
真正面に視線をずらすと、同じように静かに自分を見つめる采姫の顔があつた。

責める風でもない。しかし哀れむ風でもない。ただ無の表情に、現実を突きつけられた気がした。

『もし、生きていられたら』

『時間がなくて…』

『時がふたりを引き裂いても…』

狭霧の声が、歌が、脳を浸食していく。  
彼が遺した最後のメッセージ。

『ありがとう…』

「うっ……あ、ああああ……!!」

破顔した彩子は、崩れるように床に座り込んだ。

そう、采姫の言う通り。  
解ってしまった。

狭霧はもういないのだと。

溢れ出した涙は止まることを知らず、いつまでも、いつまでも流れ続けた…。

半分欠けてしまった月明かりの下、采姫と侃耶はゆっくりと歩いていった。

狭霧の遺言通り、彩子を家まで送っていった帰り道。

「ね、大丈夫だったでしょう？」

勝ち誇ったように采姫は侃耶を見上げる。

「狭霧くんはちゃんと、人として逝けたね」

「ああ…」

「後は、彩子ちゃんが元気になってくれれば、いいんだけど…」

送り届けた彩子の顔からは生気が感じられなかった。

狭霧が彩子のおかげで生きて来れたように、彼女にとっても狭霧が心の支えだったのだ。

それを失って、果たして生きていけるのだろうか…。

「歌…」

侃耶がぼつり、と呟く。

「ん？」

「歌が聴こえるだろう、彼女には…」

静かにそう言う侃耶に、采姫は満面の笑みを浮かべた。

「うん！」

狭霧は、自分の死期が確実に近づいてきているのを感じているところに、同じような境遇の彩子に逢った。

互いに感じた“愛”は、限られた時間が生み出した幻想だったのかもしれない。

けれど、そこに“愛”は確かに存在した。

互いを思いやる、温かい心が……そこにあつた。

今はその心のせいで苦しいだろうが。

狭霧の遺した物が、きっと彩子を救ってくれるだろう……。

「“永遠”……か」

月を見上げて、フ、と笑みを漏らす。

「なんて綺麗で……残酷な言葉」

ぽつり、と上空から冷たいものが落ちてきて頬を叩いた。

ぽつり。

ぽつり。

雨は次第に強くなる。しかし半月だけは雲の切れ間からぽっかりと

顔を覗かせ、雨に濡れる2人に弱い光を届けた。

雨の冷たさを感じない。

次第に冷えていく夜風も。

采姫にとっては、何も感じる事の出来ない無機質なもので、  
けれど。

そっと握られた手から伝わる温もりだけは、あたたかいと感じる。

采姫は月から侃耶に視線を移動させる。静かに見つめるその瞳に、  
穏やかに笑う。

「侃耶だけは、あつたかいなあ」

トン、と軽く肩に頭を乗せ、寄りそう。

“永遠”

采姫にとっては、残酷は言葉。

だけど、侃耶がいてくれるなら。

それはきつと、美しいものに变化する。

。

“Eien” is poetry by Haruki .

Thanks!



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9295e/>

---

月幻影

2010年12月30日02時48分発行